
犬の仕返し

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

犬の仕返し

【Nコード】

N3694D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

登校中に間違えて犬のメケの尻尾を自転車で踏んでしまった真一郎。すると犬が怒って。実際にあったら驚くどころではないでしょう。

第一章

犬の仕返し

宮脇真一郎は中学校に自転車を通っている。田舎の学校で辺りは田んぼだらけでそののどかな中をいつも通っているのである。

学校まで彼はいつも一人だ。一人の方が気楽だと思ってもいる。この日もスポーツ刈りの頭に白い学校のヘルメットを被ってその自転車で乗っていた。のんびりと自転車を走らせていると目の前に犬がいた。

白っぽい茶色の毛を持つ犬だった。やたらでかく舌を出してへっへっ、としている。よく見れば彼の家近所の高坂さんの飼い犬であるメケであった。もう十年以上生きていかなり高齢の犬である。「おい、メケ」

彼は自転車を進ませながらそのメケに声をかけた。メケは何とこちらに横顔を見せて道の真ん中に座り込んでいるのである。実に邪魔であった。

「どいてくれないか？」

だがメケはどくつもりはなかった。相変わらずそこに座ってへっへっ、としている。それだけである。

「どかないのかよ。困った奴だな」

仕方なく彼がどくことにした。不満だが犬を轢くわけにはいかなのでそうするしかなかったのである。ところが。

よけそこねてしまった。それでメケの尻尾を轢いてしまったのだ。見ればその尻尾もかなり大きく長い。そんなものを道にやっているからこうなったのだがそれでもメケは鳴いた。

「ギャン！」

「あつ、御免」

真一郎は咄嗟に謝った。しかしその時だった。

「何をする！」

「えっ!？」

何とメケが喋ったのだ。キツとこちらを向いて怒った顔をしている。

「痛いだろうが、真一郎」

「痛いって御前、何で」

「!？どうした!？」

メケは驚く彼に対して言う。彼が驚いているのがわからないといった様子であった。

「俺の顔に何かついてるのか？」

「どうしたもこうしたもないだろう」

真一郎は自転車を停めていた。そうしてそこからメケに対して言うのであった。自転車には乗ったままである。

「何で御前」

「話せることがか」

「そっだよ、一体どういことなんだよ」

「何でもないことだ」

メケにとってはそうであるらしい。彼は平然としていた。

「言いたいのはあれだろう？俺が今話していることだな」

「そっだよ」

それ以外の何があるというんだ、真一郎はそう言いたかった。

「何で犬が人間の言葉を」

「俺はもう十二年生きてるんだぞ」

これがメケの言い分であった。

「話せて当然だろ。字は書けないがな」

「そんなのが理由になるのかよ」

「なるっ」

メケは胸を張って強引に言ってきた。

「充分にな」

「それでなったら凄いで」

真一郎はメケのその居直りめいた言葉に戸惑い呆れながらもそう

言葉を返した。

「何でそんなふうに」

「生きているってことはそれだけのものがあるんだ」

メケはまた真一郎に述べた。

「だからだ。わかったな」

「わからないよ」

真一郎は口を波線にさせて述べた。

「全然な」

「やれやれ、強情な奴だ」

メケはそんな真一郎の言葉を聞いて呆れてみせた。前足を人間の手のように動かして肩をすくめてみせたのである。不自然ではあるが人間めいた動きであった。

「そんな奴だとは思わなかったよ」

「思う思わないは勝手だよ」

真一郎はまたメケに反論した。

「メケのな」

「じゃあ俺が話せることは納得しないのか」

「するわけないじゃないか」

結構ムキになって言い返した。

「どうして納得できるんだよ、そんなことが」

「じゃあもう一つ見せてやる」

メケはここでまた言うのだった。

「面白いものをな」

「面白いもの？」

「そつだよ、今御前俺の尻尾踏んだよな」

メケはそこを抗議してきた。

「それは覚えているよな」

「うん、御免」

真一郎もそれは覚えている。だから彼に謝罪した。

「悪気はなかったけれど」

「だから極端にはしないさ」

メケもそれはわかっている。だがどうしても仕返しをしたいというのがまじまじとわかる。彼とて尻尾を自転車で踏まれてはかなり痛いのである。

「少しな。痛い目に遭ってもらっぞ」

「痛い目って？」

「立ってみる」

そう真一郎に告げる。

「そうしたら俺が生きて言葉を喋れるようになったこともわかるからな」

「それでわかるとは思えないけれど」

「いいから犬の話は聞け」

人の話と表現しないのがミソであった。メケは犬だからだ。人間の言葉を話して人間めいた仕草をしてもやっぱり彼は犬なのだ。

第二章

「わかったな」

「わかったよ。それじゃあ」

メケの言葉に従い立ち上がる。すると。

「そらっ」

「あっ」

右の前足を右から左に横に一闪させた。そうしたら真一郎は足をすくわれた。そうしてその場に尻餅をついてしまったのであった。

「いたた・・・」

「こういうことだ」

メケはこけてしまいお尻を押さえて痛がる真一郎に対して告げた。

「これでわかったな」

「ひよっとして今のも」

「そうだ、長生きして身に着けた」

「そういうことであつた。」

「これでわかったな」

「何かやつとわかったよ」

真一郎は痛みを堪えとりあえず自転車に戻ってからメケに答えた。

「化け猫とかと同じだよな、それって」

「猫と一緒にされるのは心外だがな」

それには少しムツとした様子だったがその通りであった。

「そういうことだ」

「じゃああれ？メケって化け犬？」

「馬鹿言っちゃいけない、俺はきちんとした犬だ」

その言葉にはきつぱりと反論してみせた。

「それはわかっておくんだ」

「わかったけれど。けれど痛いよ」

「尻尾の分だ。だが怪我はない筈だ」

こかしたことにはそう述べた。

「これでおあいこだ。いいな」

「わかったよ。けれどそれにしても」

まだ真一郎はメケに対して言うのであった。

「まさかメケが話せるなんてね」

「ははは、知っているのは御前だけだ」

それには笑って述べてきた。目がかなり細まっている。

「嬉しいだろ」

「別にそれは」

首を傾げさせる。そうしたことは思っていないのである。

「思わないけれど」

「何だ、面白くない奴だな」

「一応このことは秘密にしておくね」

真一郎はメケを気遣ってそう述べた。

「ばれたら大変だし」

「ああ。それは頼む」

それはメケもわかる。だから真一郎にも願ったのであった。

「悪いがな」

「うん。それじゃあ僕は学校に行くけれど」

「俺も家に戻るか」

メケはふと考えながら述べた。

「御主人と一緒にいたいしな」

「何だかんだで人が好きなんだね」

「そうさ。特にうちの御主人はな」

真一郎の言葉に対して頷いてみせた。

「大好きさ」

「けれど。御主人には話さない方がいいよ」

真一郎はそれも念を押した。

「驚くなんてものじゃないからね」

「それも合点承知の助だ」

随分古い言葉を使う。犬としてはかなりの高齢なのがその理由である。それがそれにつけてもかなり古い言葉である。メケの爺むさい性格がわかる。

「安心していいぞ」

「わかったよ。それじゃあね」

「ああ、勉強を頑張つて来いよ」

「うん」

「ついでに一つ言っておく」

メケはまた一言付け加えてきた。

「何？」

「今度尻尾を踏んだら承知しないからな」

「わかったよ。それじゃあね」

「ああ、またな」

何だかんだで別れを告げて真一郎は学校に、メケは自分の家に向かう。だがどうしても真一郎にとっては腑に落ちない話であった。

犬が人の言葉を話せて妖術も使える、長生きしているというだけで「何かなあ」

そのことに釈然としないまま学校に向かう。だがそれもすぐに頭の中から殆ど消えてしまっていた。行く途中で今彼が気にしている女の子と会えたからだ。彼女を見ているともうメケのことは忘れてしまっていた。彼が人の言葉を話すことも真一郎にした仕返しも。結局彼にとってはそういう程度のことではしかなかった。

犬の仕返し 完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3694d/>

犬の仕返し

2009年3月24日10時10分発行